

### 第3節 「人間椅子」の人物造形 — 〈私〉と佳子を中心に—

#### はじめに

本作品は、女性作家の佳子に届けられた一通の手紙が話の中心となっている。その手紙には語り手の〈私〉が自分の醜い容貌、異様な妄想及びその妄想を実行した経緯を一部始終、告白している。筆者は第2章第2節「「人間椅子」における感覚表現—視覚・触覚を中心に—」において、語り手の〈私〉の感覚表現の分析を通して一部の心理を明らかにしたが、この一節では「人間椅子」の二人の登場人物、家具職人の〈私〉と女作家の佳子を中心に本作品における人物造形を論じたい。

#### 1. 〈私〉の外見と職人氣質

〈私〉が書いた手紙は、受け取る相手の佳子に対して敬語を使っている。敬語は話し手と相手との間の地位、勢力、尊卑、親疎などの関係について話し手が持っている判断に基づく言語表現である。手紙における語り口から〈私〉は尊敬の念を抱いて佳子に語りかけていることがわかる。

〈私〉は佳子にとって赤の他人である。このような、唐突に佳子に手紙を送り、不思議な罪悪を告白する内容は、もし普通体などくだけた言葉遣いで手紙を認めるのなら、佳子はきっと差し出し人を無礼な人だと考えるだろう。あるいはあまりの恐怖のため、途中から手紙を読むのを止めていたかもしれない。この点から考えれば、〈私〉が敬語を使うもう一つの理由は、佳子の自分に対する警戒心を下げ、敵意を感じさせないためでもある。

次には、手紙の中で〈私〉はよく自分の外貌について「醜い」「お化けのような顔」「貧乏な一職人」などマイナス的に評価している。この部分は前の第2節においてすでに取り上げて論じた。その結論として、〈私〉が自分の外貌、自分自身、そして自我の存在する現実世界に対して深い劣等感を抱いているため、世間から椅子の世界へ逃げたのである。このような行為から見れば、〈私〉は現実から目を背ける、逃避癖のある人であることがわかり、現実にも目を向ける勇気がなかったため、逃げる手段を選んだのである。

自分の醜い容姿にコンプレックスを抱いていることがくり返されているが、

作品には〈私〉の外見について具体的描写はない。つまり「醜い」「醜貌」などはすべて〈私〉自身による自己評価である。心理学者の安田一郎は『人間性の心理学』において、劣等感について次のように説明している。

「器官の劣等」が「劣等感」になるというのは、自分の器官と標準とが比較され、その相違が意識にのぼり、自分の器官に注意が向くことである。もっと具体的にいおう。これまでの日常生活に突然変化が起ったとき(中略)適応に失敗し、その原因は自分の器官が他人と違う——客観的には、とるにたらないちがいにせよ——ためだと、自己の器官に注意がむく。こうして失敗のために発散(開発と心理学ではいう)しなかった緊張(もやもやした感と考えてもよい)は、心の底にひそみかくれるが、その強さは弱まらずむしろ増す。そして自分の弱み(ここでは器官の劣等)を自分自身や他人に暴露させるような状況が現われると、あの緊張はうごめきだし彼は心の中に苦痛、恐れを感じるようになる。これが「劣等感」とよばれるものである<sup>1</sup>。(下線筆者)

上述の説明をみると、劣等感を生み出す前に、必ず一つの基準がある。自分の器官はその基準に及ばないこと、あるいは他人との相違の部分があることを意識してこそ、心の中にある劣等感は顕在化するのである。しかしその基準は動かぬものではない。もし比較の基準が高いなら、どのような顔立ちでも、劣等感を感じる場合がある。

佳子への手紙の中で、〈私〉は自分の外見についてマイナス的に評価している。また「埃まみれになって遊んでいる、汚らしい子守女でさえ、私なぞには、見向いても呉れはしない」(p.612)と述べている。「汚らしい子守女」にさえ及ばないので、〈私〉の抱いている劣等感の深さのほどがわかる。そして〈私〉は女性の目をかなり意識している点から見れば、男性よりも女性の評価が〈私〉自身の判断基準を左右していると言えよう。

〈私〉は自分の外見と身分に深い劣等感を抱いているが、自分の作った椅子に座って、妄想世界に耽っていた時、その妄想世界において自分の描いた「有名な画家の油絵」「偉大な宝石の様な装飾電燈」や「高価の絨毯」(p.611)など高

<sup>1</sup> 安田一郎著・宮城音彌編『現代心理学4 人間性の心理学』、河出書房、1954年、pp.79-80。

価な物に憧れを抱いている。さらに自分の作った椅子が上述のような贅沢な部屋にふさわしいと考えている点から見れば、〈私〉は自分の作った椅子を芸術品と同じレベルの品物だと考えていることがわかる。そして椅子を仕上げ、それを他人の手に渡さなければならない時、いつも〈私〉は「いい知れぬ味気なさに襲われ」(p.612)で、死んだほうが良いと考えている。この描写からも〈私〉は職人氣質の人であり、芸術品のような事物に心を惹かれていることがわかる。

また〈私〉が有名なダンサーの肉体に触れた時、「芸術品に対する時の様な、敬虔な気持ち」(p.624)になった。この点から見れば、〈私〉は家具職人として自分の作った作品と自分が認める芸術品に対して、異常な執着心を抱いていることを示している。そしてこのように芸術品に対する執着心は、〈私〉の家具職人としてのプライドの高さを物語っている。〈私〉が深い劣等感を感じる原因は、主に自分の醜い外見に由来するものの、一方では〈私〉の芸術品に対する拘りとも無関係ではなからう。

## 2. 〈私〉のエゴイズムと支配欲

語り手の〈私〉は椅子を通して、さまざまな感触を感じ、そこから異様な快楽を味わった。第2節にも取り上げて論じたが、〈私〉が椅子に隠れるその第一の目的は実は盗みを働くためである。自分の妄想世界を実現させるためには大量の金銭が要り、そのための窃盗行為である。このことから、〈私〉は盗みという犯罪行為に頓着がなく、目的のために平気で犯罪を犯すような感覚の持ち主であることがわかる。要するに、〈私〉は社会の常識や倫理観、道徳的価値観をあまり持ち合わせていない人物と言えよう。

語り手の〈私〉はさらに椅子から出て盗みを働く時の自分の行動を「やどかり」「蜘蛛」のような生物に譬えている。

大きな蜘蛛の様な格好をしていて、人がいないと、その辺を我物顔に、のさばり歩いています。一寸でも人の足音がしますと、恐ろしい速さで、貝殻の中へ逃げ込みます。そして、気味の悪い、毛むくじゃらの前足を、少しばかり貝殻から覗かせて、敵の動静を伺って居ります。(p.616)

上述の引用から、自分が盗みをする時は、他人に発見されるかもしれない緊張感の中で、ちょっとでも人の足音が聞えると、すぐやどかりのように殻に戻

って周りの動静を窺っていたのである。そして、その緊張感は〈私〉にとって、「それがまあ、どの様な不思議な魅力を持って、私を楽しませたことでございましょう」(p.617)というような快感を与えてくれる感覚であった。

金銭を手に入れることよりも、その緊張する刺激感を味わうことのほうが〈私〉の心を満足させてくれる。つまり、〈私〉は物質の欲望よりも、自分の欲望を満たすために犯行を続けていると言える。いわば、自分の欲望のために、犯罪をしてもかまわないというエゴイズムを持っている人である。

語り手の〈私〉の人物像についても一つ注目すべき点は、その支配欲である。椅子を通して接触した人物の一人である強国の大使の描写において〈私〉はその大使の殺害を想像して、次のような感想を述べている。

彼の本国は素より、日本の政治界は、その為に、どんな大騒ぎを演じることであろう。新聞は、どんな激情的な記事を掲げることであろう。それは、日本と彼の本国との外交関係にも、大きな影響を与えようし、又芸術の立場から見ても、彼の死は世界の一大損失に相違ない。そんな大事件が、自分の一挙手によって、易々と実現出来るのだ。それを思うと、私は、不思議な得意を感じないではいられませんでした。(pp.623-624)

上述の引用があるように、強国の大使であり、また世界的に有名な詩人でもあるこの男性の生死を左右することができる〈私〉は自分の力の可能性に改めて気付いたのである。強国の大使の運命について「そんな大事件が、自分の一挙手によって、易々と実現出来るのだ。それを思うと、私は、不思議な得意を感じないではいられませんでした」と感想を述べている。いつも自分の外貌と出身に深い劣等感を抱いている〈私〉は、いとも簡単に強国の大使の運命を左右し、さらに世界の情勢に影響力を及ぼすことが可能である。もし本当に大使を殺したら、全世界は自分の存在に気付き、自分はたちまち注目の的となるのだろう。それに、自分の存在感も強く世間に示すことができる。〈私〉が「不思議な得意」と感じたのは自分がたやすく強権を持つ男性の生死を左右できる事実に気付いたからである。

心理学者の加藤諦三は『自立と孤独の心理学』において、劣等感を抑圧して

いる人は実は反動形成的な行為をする傾向があると述べている<sup>2</sup>。反動形成について加藤は「反動形成とは、抑圧された諸傾向と正反対の態度が強調して示されること<sup>3</sup>」と解釈している。また加藤はいつも劣等感を感じる人について、心理学に基づいて次のように説明している。

劣等意識の抑圧と反動形成が優越感、自惚れ、虚勢であろう。自分の劣性を取り戻そうと求めている潜在意識があるからついつい、自分をひけらかすことになる。威張り散らすのは、劣等意識を抑圧して、反動形成的な行動を取っているということである<sup>4</sup>。

以上の説明によると、優越感、自惚れ、虚勢などの態度を示す人は実は自分の心に隠れ、深い劣等感を抑圧するためである。そうになると、自分に劣等感を感じる〈私〉が特に強権を持つ男性の死生に強い支配欲を示すことは、実は自分の心に隠れている深い劣等感に対する抑圧行動の反動の行為かもしれない。つまり強国の大使に対する支配欲と〈私〉の劣等感とは実は緊密の関係にあると言える。

### 3. 〈私〉の女性観

まず、〈私〉は女性の自分に対する評価を気にするが、自分は「汚らしい子守女」の基準にも及ばない醜い男なので、心の中に深い劣等感を潜めている。それに〈私〉は女性との接触機会が少なく、女性と付き合う勇気も持っていない。しかし自分の妄想世界に耽っている時だけ、自分は理想の女性と愛を語り合うことができる。

この私が、貧乏な、醜い、一職人に過ぎない私が、妄想の世界では、気高い貴公子になって、私の作った立派な椅子に、腰かけているのでございます。そして、その傍には、いつも私の夢に出て来る、美しい私の恋人が、におやかにほほえみながら、私の話に聞入って居ります。そればかりではありません。私は妄想の中で、その人と手を取り合って、甘い恋の睦言を、

<sup>2</sup> 加藤諦三『自立と孤独の心理学』、PHP 研究所、1988 年、p.155。

<sup>3</sup> 注 2 前掲書参照、p.155。

<sup>4</sup> 注 2 前掲書参照、p.155。

囁き交しさえするのでございます。(p.611)

以上の引用を見ると、〈私〉は女性との恋を夢に見ていたことがわかる。それに〈私〉の理想の恋の対象はただ美しいだけでなく、自分の話にも耳を傾けてくれ、そして二人は愛し合う。つまり外見の良さのみならず、〈私〉は恋人との心の通じ合う会話や接触を望んでいる。また、「美しい私の恋人が、におやかにほほえみながら、私の話に聞入って居ります」「その人と手を取り合って、甘い恋の睦言を、囁き交しさえするのでございます」という言葉から見れば、触覚と聴覚を通して、恋人の心と触れ合うことこそが〈私〉の追い求める恋なのである。

その一方、〈私〉は椅子の中で性別や年齢など異なる人々と接触したが、異国人女性と日本人女性との差異について次のように述べている。

私は数々月の間も、それ程色々の異性を愛したにも拘らず、相手が凡て異国人であった為に、それがどんな立派な、好ましい肉体の持主であっても、精神的に妙な物足りなさを感じない訳には行きませんでした。やっぱり、日本人は、同じ日本人に対してでなければ、本当の恋を感じる事が出来ないのではあるまいか。(p.625)

この感想においても〈私〉が憧れる恋は触覚の刺激や官能的な享楽だけではないことがわかる。自分と精神的に理解しあえる日本の美しい女性こそ〈私〉の追い求める恋の対象である。

本論第2章第2節の「人間椅子」における感覚表現—視覚・触覚を中心に—では、〈私〉が佳子に恋をした理由、そして佳子のために、椅子から脱却する経緯について触れた。佳子に対する感情から、〈私〉の追い求める女性像も見えてくるだろう。

〈私〉は美しい女性の肉体美に対して芸術品に対するような敬虔の念を抱いている。しかし外見的美しさだけでは〈私〉を満足させることができない。美しい肉体を持ち、日本人同士として愛を語り合えること、そして同じ芸術家同士として、心が通じ合うことができる。このような女性こそ〈私〉の憧れの対象であり、そして聡明で美しい佳子は理想の相手と言えよう。

#### 4. 佳子と作家志望者である〈私〉の人物造形

「人間椅子」は作中作という構造をもつ作品であるが、前の小節では作中作の中心人物である〈私〉の人物像を分析してみた。ここでは外枠の物語の二人の中心人物を論じてみたい。この二人とは閨秀作家の佳子と作中作を書いた人物—作家志望者である。なお便宜のために、それぞれ「佳子」と「作家志望者」をもって称する。

佳子には二つの立場がある。一つは外務省書記官の妻であり、もう一つは美しい閨秀作家である。「佳子は、毎朝、夫の登庁を見送ってしようと、それはいつも十時を過ぎるのだが、やっと自分のからだになって、洋館の方の、夫と共用の書齋へ、とじ籠るのが例になっていた」(p.607)という書き出しがあるように、良妻の一面を持っている。そして夫がいない時の佳子は自分の仕事に専念する閨秀作家である。

佳子の作家活動について「外務省書記官である夫君の影を薄く思わせる程も、有名になっていた」(p.607)と描写されている。さらに「毎日の様に未知の崇拜者達からの手紙」(p.607)が佳子の所へ届いている。つまり佳子は常に家にとじ籠っているが、作家としての才能が認められ、夫よりも有名になっているほどであった。それに毎日に見知らない人達から届いた手紙も佳子の作家としての人気の高さを語っている。「どの様な手紙であろうとも、自分に宛られたものは、兎も角も、一通りは読んで見ることにしていた」(p.607)という佳子の行動から見れば、自分の仕事に対して真剣であり、また作家としてファンを大切にしていることもわかる。このように佳子が作家業において成果を上げていることから彼女が聡明で、社会的に自立している女性であることがわかる。

次に佳子の性格について論じたい。まず、異常な告白の手紙を手にとって読んだ時、気味悪いものだと思っていたが、好奇心のためしばらく読み続けた。さらに、勘のいい佳子は「手紙の半程まで読んだ時、已に恐しい予感」(p.629)をして、椅子の置かれている書齋から別の部屋へ逃げていった。しかし「どうやら気懸りなままに、居間の小机の上で、兎も角も、読みつづけた」(p.629)と恐怖を感じながらも読むのをやめなかった。一連の描写から佳子が強い好奇心の持ち主であることを示している。

そして手紙を最後まで読んだ佳子は「背中から冷水をあびせられた様な、悪寒を覚えた」(p.629)が、彼女は家の人を呼んで椅子を調べさせたりせずに、ただどう対処するか考えていた。この点から見れば、佳子は好奇心の強い女性だ

けでなく、冷静に対処法を考えるような知的な女性であることがわかる。

最後でようやく明されるが、佳子に届けられた一通目の手紙は実は一人の作家志望者による創作である。二通目の手紙は一通目が創作であることを告白し、そしてタイトルを付け忘れたことに対し謝罪している。そして二通目の書簡は作者の性別について特に言及はしていないものの、文面から男性の手によるものと思われる。

このような構成は、本論の第2章第1節「人間椅子」の構造分析—作中作としての「人間椅子」—においてすでに取り上げて論じたが、物語の中にもう一つの物語を内包する構造をする「枠物語」なのである。このような構成は「人間椅子」のサスペンス性と面白さを際立たせ、また読者に不安と未知に対する恐怖心を煽り立てるための用意である。

## おわりに

この一節では、「人間椅子」における〈私〉と佳子の人物造形について論じてみた。上述の分析をまとめると、以下ようになる。

まず、〈私〉が佳子に送った手紙は敬語を使っている。それは〈私〉が佳子よりも身分が下で、佳子に敬愛の念を抱いているからである。また、家具職人の〈私〉は現実の自分に対して、深い劣等感を抱くような人であるが、芸術品にかなり執著する一面も窺え、〈私〉の職人氣質を物語っている。そして自分の欲望を実現させるために、椅子に隠れて盗みをするなど、犯罪行為をためらうことなく犯すような、道徳感の乏しい人間でもある。それに自分の欲望を満足させるために、他人に迷惑をかけることも辞さない性格であり、例えば勝手に佳子に手紙を送って、彼女に告白する点からも〈私〉がエゴイズムの強い人間であることがわかる。

以上の特質のほかに、〈私〉は実は自分の存在感を強く主張したい人物でもある。それは自分の身分が社会的地位の低い職人であることと、自分の容貌が他人よりも劣っていることからくる劣等感が、彼の心に深く根ざしているためである。強国の大使の殺害を想像する〈私〉は世界の情勢に影響を及ぼす可能性に気づき、味わったことのない支配の快感に深く酔いしれていた。この感情も彼の心に根ざした劣等感と緊密の関係にあると言える。

以上に見てきたように、〈私〉は世間の視覚の価値観の下で劣等感を抱き、また他人との接触を避けてきたため、自分の存在の価値を肯定することができな



かった。しかし、椅子と一体化する過程で、さまざまな人との感触経験を通して、ゆっくりと自分の存在の実感を取り戻した。最後に佳子に対する愛着から彼女に自分の存在を伝えたくなり、〈私〉は魅惑の世界である椅子から脱却し、醜い現実と正面から向き合うことに決めたのである。これは佳子が〈私〉の理想に最も近い特質を有する女性だからである。

「人間椅子」の構造から本作品の人物造形を見ると、内包する物語の〈私〉のほかに、外枠の「人間椅子」の中心人物に佳子と作家志望者の二人がいる。佳子は外務省書記官の妻として、旧来の女性の美徳、つまり良妻の一面を持っている。しかし一方では、芯の強い佳子は自我と知性を備えた現代女性のイメージもある。そして佳子が成功した作家として社会的に自立した女性であることも示している。

